第 19 回：ものの姿とあり方を大切に

教場長　田中仙融

茶会に伺うと、大きなバックを持って茶席に入られる方が目に立ちます。
大きいとはどういう事なのでしょう。きっと、お持ちになられている方は、十分に小さなものになさったつもりでしょう。

また、稽古の時には、数寄屋袋を持たないことが多いせいか、物を仕舞う場所に困っている方が目に立ちます。
帯の背中にプリントや数寄屋袋を入れている方を見て、会長が「帯はそのためにあるものではないよ」と小さな声で囁いているのをよく耳にしました。

やっとその気持ちがわかる様になりました。

皆様とは異なり、お太鼓を物入れにしてしまっている御嬢さんを町で見かけたからです。
いわゆるお太鼓と言われるふくらみに、この帯の結び方の良さはあるのです。それを物入れに使ってしまっては、やはり帯が死んでしまうというものなのでしょう。
本来の姿と違った形で使われていると、悲しいものです。私たち茶道人は、茶席に持って入る扇子と、涼を求める扇子をきちっと分けて使っていますが、茶席の扇子で仰がれると、嫌なきもちになるのではないでしょうか。

昨今、本来の姿を忘れて、使えればよい、できればいい、かっこいいのではない？という様に、勝手に使ってしまうことがあります。しかし一つ一つ作られているものには、その意味と伝来というものがあるのです。
ご存じなければ尋ねたり、調べてみてその元の姿を大切にしてみませんか。
私たちが嗜んでいる茶道は、日本人が大切にしてきた事柄の積み重ねです。茶道以外の場所でも、大切にする気持ちを持つことが素敵な茶道人へとまた一歩近づいたことと言えるでしょう。

平成 28 年 11 月発行　会報「えんじゅ 89 号」掲載